

永田和宏

私の京都(4)

御土居



豊臣秀吉の築いた史蹟「御土居」

私の生まれは滋賀県、それも西
江州と呼ばれる地域、現在の高島
市だが、4歳の時に京都に移り住
むことになった。以後、6年間の
東京と2年間のアメリカへの留学
以外は、ほぼ京都暮らしが続くこ
とになる。正確には数年、妻の実
家があった滋賀の石部町（現在の
湖南市）に住んではいたが、その
間も職場の京都大学に毎日通っ
ており、私の一生の時間のほぼ全
てを京都で過ごしてきたことになる。

最初に住んだのは、上賀茂神社
の近くの紫竹と呼ばれる地域であ
り、小学校は紫竹小学校。本当は
加茂川中学校に通うはずだったの
だが、中学に入る直前に右京区
の御室に引越したので、双ヶ丘中
学校、嵯峨野高等学校が私の母校

である。
小学校時代は、学校が終わると
ほとんど毎日友達と遊んでいた
が、上賀茂神社や賀茂川など遊び
場所には困らなかつた。上賀茂神
社ではよく映画のロケが行われて
おり、アラカンこと嵐寛寿郎の鞍
馬天狗のロケに出くわした時のこ
とはよく覚えてる。あるいは上
賀茂神社の裏山全部を陣地にした
かくれんぼなど思い出は多いが、
それらは近著『あの胸が呷のよう
に遠かつた』に書いたので繰り返
さない。

加茂川中学校の横には御土居が
あり、これも私たちの格好の遊び
場所であつた。
御土居は豊臣秀吉が京都を整備
した時、外敵の来襲に備えて築い

た防塁（土塁）である。京都をぐ
るりと囲んで、総延長は約23キロ
もあつたという。これによって洛
中と洛外が分けられたのであり、
鴨川の東、京都大学などは洛外と
いうことになる。

私は全てを巡り歩いたわけでは
ないが、少なくとも十数カ所には
その跡が残っているはずである。
「鷹峯旧土居町」、「紫野西土居町」
など、「土居」という名の付いた
町名も多く残っている。

私たちが遊び場所にしていたの
はまさに御土居の最北端、それも
東西と南北の土塁の角に当たる位
置にあつた。今は長さが10メートル
高さは3メートルほどの小さなものしか



紫竹近くにある上賀茂神社

残っており、周りを住宅に取り
囲まれてなんとも貧相な史跡とい
う感を拭えないが、私たちの少年
時代はもつと長く、もつと高く、
周りに住宅などはほとんどなく、
御土居の存在感は圧倒的だつた。

何より現在は四方を金網で囲ま
れちんまりとした史跡として嚴重
に保護されているが、昔は囲いも
何もなく、誰でも自由に登ること
ができた。御土居を中心にして、
私たちのチャンバラごっこや鬼
ごっこなどの遊びがあつたのかも
しれない。

なかでも私たちが情熱を燃や
していたのは、御土居の上から竹
そりで滑り降りる遊びであつた。
そりといっても雪の上を滑るので
はなく、季節に関係なく御土居の
斜面の土の上をそのまま滑るので
ある。

当時の大宮通界隈には製材所が
多くあつた。そんな所へ行って不
要な木片や角材をもらつてきて、
四角く組んで尻を乗せる台を作
る。青竹を二つに割り、火で炙つ
て先を曲げ、台の下に釘で打ち付

ける。身体を支えるためのひもを
取り付ければ、とりあえずこれで
一人乗りのそりの完成である。
それぞれ自分のそりを手作り
し、持ち寄つて御土居の上から滑
り降りる。土塁であつた御土居に
は木は生えておらず、草の生えて
いる場所もあつたが、ほとんどが
土の露出した斜面であつたのは、
私たちがそりで滑っていたからだ
ろうか。

もちろん雪の上を滑るような快
適さからは程遠く、凸凹の土の斜
面を滑るので、ほとんど暴れ馬に
乗っているロデオのような様相で
ある。途中で投げ出されるかそり
が分解するかで、下まで無事に滑
り降りるなどということはずな
かつたような気がする。途中で放
り出される仲間を大声ではやし、
笑い合うのが楽しいのだった。

1、2度滑つたら、そりはだ
いたい使い物にならなくなつたし、
それ以上にそりから放り出されて
そのまま尻で滑ることも多く、ズ
ボンが破れては母親に叱られたも
のだ。

なんとも他愛のない思い出だが、
京都の歴史的な遺跡を自分たちの
そり、そして尻でいくぶんかは削
り取つたんだぜという記憶は、そ
んな場所に近付くこともできない
今の子どもたちに、少しでも自慢
してみたい気もするのである。



〈ながた かずひろ〉
1947年滋賀県生まれ。歌人・細胞生物学者。京都
大学理学部物理学科卒業。京大再生医学研究
所教授などを経て、2020年よりJT生命誌研究
館館長。日本細胞生物学会元会長、京大名誉教
授、京都産業大名誉教授。歌人として宮中歌会始
詠進歌選者、朝日歌壇選者を務める。「塔」短歌
会前主宰。読売文学賞、空室賞など受賞多数。
2009年、紫綬褒章受章。歌人・河野裕子と1972年
に結婚し、2010年に亡くなるまで38年間連れ添
った。著書に『知の体力』『置行堀』『歌に私は泣くら
うー妻・河野裕子 闘病の十年』など多数。